

# 美しい日本の私

## —— 高齢者文学人生論

川端康成 (1899-1972)

『美しい日本の私』(1969) 「講談社」

沢野久雄『小説川端康成 (1774) 「中央公論社」

臼井吉見『事故のてんまつ』(1983) 筑摩書房

川端秀子『川端康成とともに』(1983) 新潮社

### 仏界入り易し、魔界入り難し

川端康成が他界したのは昭和四十七年四月一日。享年七十二。ガス自殺と報道されたが、睡眠薬を服用していたともいわれており、自殺ではなかったという説もある。(睡眠薬服用説は秦野章元警視總監など、自殺を否定したのは芹沢光治良元ペンクラブ副会長など)。

臼井吉見の小説『事故のてんまつ』によれば、見込まれて、川端家のお手伝いさんになった安曇野の女性が辞めてしまったのが自殺の原因となっている。しかし、この小説は遺族が名誉毀損で提訴し、和解の際の条件により絶版となった。

要するに、真相は藪の中で、本人でないかわからない。遺書はなかったが、しいていえば、四年前、ノーベル文学賞を受賞したときの記念講演のスピーチが遺書だろう。

意味はいろいろに読まれ、またむづかしく考へれば限りがないでせうが、「仏界入り易し」につづけて「魔界入り難し」と言ひ加えた、その禅の一休が私の胸に來ます。究極は眞・善・美を目ざす芸術家にも「魔界入り難し」の願ひ、恐れ、の、祈りに通ふ思ひが、表にあらはれ、あるひは裏にひそむのは、運命の必然でありませう。「魔界」なくして「仏界」はありません。そして「魔界」に入る方がむずかしいのです。心弱くてできることではありません。



# 美しい日本の私

——— 高齢者文学人生論

芥川龍之介や太宰治など自殺した作家の例をあげ、さらに「もの思ふ人、誰か自殺を思はざる」として、あの一休禅師が、二度も自殺を企てたこととにふれ、「仏界入り易し、魔界入り難し」の願ひを引用している。

いったいこれはどういう意味なのか。私の単純な頭では、魔界に入るとは自殺という意味のような気がする。ノーベル賞の記念講演で自殺をほめかす心理は庶民感覚では理解できないが、川端康成は庶民感覚の持主ではない。眞・善・美を目ざす芸術家であり、新感覚派の作家として知られている。新感覚というのは常識的な庶民感覚ではなく、天才的なひらめきの感覚だと思う。

春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて

冷やしかりけり

道元

形見とて何か残さん春は花

山ほととぎす秋はもみぢ葉

良寛

こういう和歌は庶民感覚でも理解できるが、仏界入り易し、魔界入り難し、となると、庶民感覚は簡単には受けつけない。親鸞の「善人往生す。いはんや悪人をや」も一休の「仏界」「魔界」と通ふ心もありますが、行きちがふ心もありますと川端はいうが、眞・善・美とはなんだろうか。

心とはいかなるものを言ふならん

墨絵に書きし松風の音

一休宗純